

Ⅲ まとめ

今次調査区は前述のように、440m²と塚部分約80m²の計520m²を調査した結果、縄文時代前期より近世（近代初頭）にわたる複合遺跡であった。そこで、当地における土地利用の変遷を略記しまとめとする。

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡1軒（SI-2）と土坑5基である。このうち、平面形が隅丸長方形の2基（SK-2・4）は、遺物の出土はなかったものの、埋積土中に今市・七本桜軽石粒を多く含み、非常に硬く締まるなどの特徴から早期末～前期頃に属すると推察される。所謂「陥し穴」的な性格のものと見られる。

竪穴住居跡は、西側が調査区外に延び、北西部が古代の住居跡に切られるなど部分的な調査であり、さらに明確な竪穴の掘り込みや柱穴も確認できず、規模形状を明らかにできなかった。また、確りした石囲い炉が設けられていたものの、その内部にほとんど焼土等が遺存せず、出土遺物も僅かに土器片1片のみであった。本跡は出土土器片より、中期後葉と推察される。なお、この住居跡の南東12～15mにほぼ同時期と推定される土坑が3基（SK1・5・8）が所在した。これらのうち最も遺存状態の良いSK-1は、開口部が径90cm程の円形で、壁が部分的にオーバーハングしており、本来は小振りな袋状土坑であったと推察され、埋積土中より数片の土器片が出土した。他2基も遺物の出土はないが、規模・形状から同様の遺構と思われる。したがって、該期には小規模な集落が営まれたものの、継続性はなく比較的短期であったと考えられる。

また、遺構に伴わず後世の溝や、土坑などの埋積土中より、前期や晩期頃の土器片が出土しており、これらの時期にも何らかの土地利用があったことが知られる。

(2) 古代東山道跡について

古代の遺構としては、竪穴住居跡1軒（SI-1）、溝2条（SD-1・2）、土坑3基などがある。

先ず2条の溝のうち東側の太いSD-1は、かつて上野遺跡第Ⅱ次調査区で確認された、東山道の側溝と推定される3条の溝のうち最も東側に位置するSD-1の延長と判断される。この溝は第Ⅰ次調査区ではSD-2とほぼ平行するものの、第2次調査区の南端付近より他の2条とは平行せず東にそれて直線的に150m程延び、今次調査区の中程で約10度西偏して北進する。これは、このまま直進し台地東縁の凹地に到るのを避ける為と推察される。当地区では、北端断面で上幅3.5m、深さ1.1m、底幅0.85mで、断面逆台形であった。なお、この溝の西約2mに（芯々では3m）に位置し、ほぼ並走するように設けられたSD-2は、上幅約1mと前者の2分の1ほどで、深さも50cmとやや浅い断面V字型の溝である。この2条の溝は前述のように規模・断面形等が異なるものの、配置や埋没状況から同時併存の可能性が高い。SD-1は該期の遺物が認められなかったが、SD-2は北端の埋積土上層より9世紀後半代の須恵器坏が出土している。また、両者とも上部の埋積土が非常に硬く締まっており一時道として利用されたものと推察されるが、両者の間及びこの西側に本来の明確な路面は確認できなかった。また、上野遺跡ではSD-2に対応する溝が確認されておらず、両地区の間で始まるか、西から延びて北に屈曲したものと推察される。

なお、前述の上野遺跡の報告では、このSD-1が東にそれて広がることの可能性として、当地が「衣川

駅家」の比定地であることから、駅家に近接したため道幅が広がったとの見方を示している。また、SD-1の東側で確認された、掘立柱建物跡や所謂「氷室」状土坑等の存在も傍証資料としてあげている。残念ながら、明確な官衙的施設はいまだ確認されておらず、今次調査区でもこれを強く裏付ける資料は得られなかった。

ただ、今回はSD-1の東側にのみ古代の遺構が見られたが、今回は、SD-1・2の西側に平安時代の竪穴住居跡（SI-1）が確認された。本跡は大部分が西の調査区外に延びるものの、南北長3.8mで東壁の中央やや南寄りにカマドが築かれていた。また、カマドは住居の廃絶に際して意識的に破壊されたと見られるが、カマド付近より須恵器片、土師器甕などが出土し9世紀後葉の住居跡と推定される。本跡の特徴として床面の段差がある。南から北に向って、南・中・北と順次10cm程ずつ高くなっていた。確認当初、建て替え・重複を想定し追及したが、土層に変化が見られず、床面に点在した炭化物が全体に分布することから最終段階までこの状態であったと判断されたが、その性格については確認できなかった。かつて南東方約7kmの「みずほの緑の郷」開発に際して東山道跡の所在確認のため延べ2.4kmのトレンチにて試掘調査を実施した。残念ながら東山道跡を確認できなかったものの、新規の古代集落跡の西刑部上原遺跡を確認し、この遺跡で調査した竪穴住居跡のうち2軒が、カマドを境に東と西で床面に10～15cm程の高低差が認められた。偶然かも知れないが、ともに東山道ルートに近隣して存在する点で、興味深く今後の課題としたい。

本跡は前述のように9世紀後葉と考えられることから、側溝がほぼ埋没した段階で駅家の道幅の減少や若干の移動が行われ、竪穴住居の構築が可能な状況になったと判断される。また、今次調査区で確認した該期の3基の土坑のうち、南東部に所在した2基の土坑（SK-6・7）は、明確な柱痕跡や柱当りを確認できなかったが、埋積土の状況から掘立柱建物跡の柱掘方の感を受ける。両者は約5.2mの間隔（芯々）で東西に並び、間隔が広すぎるが両者の間や周辺にこれらと組み合う柱穴は認められなかった。南側は現道の切り通しで削平されていて確認できないが、対応する柱穴が存在した可能性も全くは否定できないであろう。前記の上野遺跡第Ⅱ次調査区においても、柱間の広い櫓的な掘立柱建物跡（調査区外に展開の可能性もあり）の存在が確認されており、当地区のものも類似の施設と推考する。

いずれにせよ、「東山道跡」の所在、「衣川駅家」の所在地を求めての調査であったが、駅家の所在地、SD-1が東に大きくそれた理由は今回も謎のままと言わざるを得ない。今回はこれに、SD-1に並走するSD-2の性格という疑問が加わり、明確な路面も確認できなかった。

また、当地付近を「衣川駅家」の比定地とする説が大勢を占める中、より鬼怒川の渡河地点に近い「日枝神社南遺跡」付近を比定地とする説（木本・1996）もあり、更なる資料の蓄積に期待したい。

(3) 免の内台1号塚について

中・近世の遺構としては塚1基（免の内台1号塚）のみである。

先に、その名称については、周知の遺跡としての登録名「免の内台古墳」にちなむもので、地名（小字名等）や塚に関する伝承などとは無縁のものであることを明記する。なお、前述の如く遺跡の東下方には「木の川」という小字名が残り、「免の内」という小字名は北東方約800mに所在する。また、他にも同種の塚が近隣に存在する可能性を想定して1号塚と名称したが、現在も自然地形が残る調査区の周囲から北側の一帯を踏査したが、本跡以外の塚は確認できなかった。既に開発されている南と西側については明確にしがたいものの、単独で存在した可能性が高い。